

企、併いたづら者のいひなしに同心せられ、剩恣之訴訟、中々過法候。將又予令隱居云々世務等、更無其儀候。佛法相續之儀、猶以不及其沙汰候處、諸國門下へ申ふる、趣、言語道斷虛言共候。所詮開山影像守申、去十日至紀州雜賀下向候間、此以來諸國門徒之輩、遠近によらず、難路をしのごても開山聖人之御座所へ參詣いたさるべき事、可爲報謝候。抑一流勸化之趣は、なにのわづらひもなく、難行難修をすて、彌陀如來後世たすけ給へと、ふかくたのみ申人は、皆々淨土に往生すべき事不可有疑候。此上には行住座臥に、報謝の念佛可申候。彌法義無油斷可嗜事肝要候。(下問頼廉) 猶刑部卿法眼(下問仲之)少進法橋可申候也。穴賢(天正八年)。

能州 坊主衆中へ

門徒中へ

(鳳至郡本誓寺にも本文の寫あれども誤字あり。)

【法融寺文書】 珠洲郡

一六六三

被成下御書候。始中終慥可有聽聞事肝心候。

一、大坂之儀、連年諸國御門徒衆以厚志、今迄相續之段有難被思食候。雖然數十ヶ所之出城、其上兵庫・尼崎・岩屋等之儀、永々御籠城ニ付而、被相抱之儀中々不及御了簡候間、(毛利頼元) 藝州へ御下國有度之由、度々雖御懇望候、(秀家) 宇喜

多別心ニ付而無同心候。然處ニ去年以來、爲禁裏御和合之儀被仰出候。種々雖出入候、果而御退出ニ相極り候。此段被敷思食候へども、可爲如三木・有岡事眼前候へ者御開山善知識凶事御座候へ者、可爲御法流破滅事、難艱ニ依被思食、(敬如) 新門主様有御直談、則被成御加判、御退散之儀敷慮に御請之儀ニ候。如此之處ニ、佞人新門主様申勸、大坂可被相踏之御造意、剩御兩所様御間申妨、世俗共ニ被成御讓之由諸邦へ被中觸之由候。曾無其儀御事ニ候。御法流之儀、猶以不被及御沙汰候。各可被存其旨候。右之御手筈ニ付而、去十日御開山尊形被守、愈御門跡様至雜賀御下向候。男女老若有難存氣色、自宗他宗共ニ一國之衆馳走被申上候段難筆筆紙候。奥郡玉

顯 如在判

顯 如在判

顯 如在判

懸・湯川迄毛頭無別儀候。根來寺之儀先々入魂之業、始泉職坊・杉ノ坊、其外歴々衆悉御禮被申上候。

一、右之趣能々被承分、爲御開山之御門徒輩者、至雜賀或者參詣、或者不依一紙半錢可被勵寸志事第一候。万事御用繁候へ者、御不如意可有推量候。此節無報謝之志者、寔可被同木石候。

一、每篇如被仰出候、如何様之奉加被申候とも、不信之族者更不可有其詮与被思食候。就其安心之一儀、被碎御心御懇被遊展候。銘心肝被聽聞申、可被遂今度之報土往生事、善知識之御本意不可過之候條、節々被參會、互可有信心之談合事肝要ニ候。此等之通幾重にも

相心得可申下由被仰出候、謹言。

(天正八年) 四月十六日

(下問少進法印) 仲之 在判

(下問刑部法眼) 頼廉 在判

能州

坊主衆中

門徒衆中

(文中に言ふ播磨三木城の陥落は本年正月十七日に在りて、本願寺顯如の石山城を去りたるは四月十一日とす。この法融寺文書は寫にして、鳳至郡本誓寺に有する同文の寫と字句に多少の相違あり。)

四月廿三日。羽柴秀吉羽咋郡福水より、織田信長に、温井景隆等の和を請ひたることを報す。

【補 文書】 尾張

一六六四

乍恐致啓上候。今度柴田加州金澤表大略致成敗、宮之腰迄人數引退候條、我等七尾表可致行覺悟に付而、加勢之儀申候處、佐久間玄蕃助當表へ罷越、既彼面へ相働可申處、從七尾一和之儀懇望申ニ付而、及其取暖申候。我等致在陣福水之地、佐久間玄蕃助普請以下迄申付、致歸陣事候。誠無比類仕様に候。次七尾より一和之儀申候。知行方之儀者、(織田信長) 上意御下知次第申事候條、最前御朱印之如御筋目嚴定之御下知忝可奉存候。此等之趣宜預御披露、恐々謹言。

(天正八年) 卯月廿三日

(羽柴) 吉 在判